

乳幼児の暴力に対する理解と対応のための枠組み

－関係発達の・社会構成的視点による整理－

鹿嶋 達哉

Ⅰ 本稿の目的と考察の対象・範囲

本稿の目的は、乳幼児の暴力に対する見方を整理することにある。

戦争やテロ、子どもによる暴力（いじめ、犯罪行為など）など、暴力への対処は現代における大きな課題の一つである。暴力は総論としてはなくすべきものであり、全面的に肯定する人はほとんどいない。しかし、暴力すべてを否定すべきではないという必要悪論や、条件付容認論には根強いものがある。本稿で扱う乳幼児の暴力に対しても、正面からその行使を奨励する大人は例外的であるが、「子どもの暴力はやむをえない」という消極的容認論から、「子どもには多少の暴力が必要だ」という積極的容認論まで、幅の広い見方が存在する。大人が用いる体罰についても同様の傾向が見られ、一般的には否定されるが、「しつけのために必要である」「やむをえない」という考えは根深い。暴力に関する議論は、「正当化される暴力はあるか？」という問いに行き着く（Tournier,1980）

本稿は、乳幼児の暴力に対するさまざまな見方を、原因論、種類・分類法、発達過程・養育関係における位置づけ、機能（暴力の発現・抑制による影響）などの点から整理することにより、子育ての現場で生じている具体的なエピソードをその都度捉える視点となるような複数の見方を提示し、一回一回の状況に応じた理解と対応が可能となるような枠組みを提案することを目的とする。

従来の研究では、暴力よりも攻撃性という概念が用いられてきた。本稿で暴力という用語を用いるのは、①攻撃性が広く複雑な概念であること、②攻撃性は安定した性格特性を含意しているのに対して、暴力は顕現行動であり、③保育・教育現場で問題とされるのは暴力であることなどによる。ただし、攻撃性に関する理論や先行研究を引用する場合には、原著に基づき攻撃性という用語を用いる。

暴力と攻撃性の定義は複雑をきわめ、本稿の範囲を越えるため他に譲る（例えば、Baron & Richardson,1994；Geen & Donnerstein,1998；岡田,2001；山崎・島井,2002）。ここでは暴力を身体的攻撃と同義とみなし、「他者の身体に対する身体や道具を用いた攻撃行動」とゆるやかに定義する。

暴力（身体的攻撃）は量的には乳幼児期に最も多く観察されるが、その後徐々に減少する（Hartup,2005）。質的には思春期以降、激しさと社会的影響力（他者の被害度）が増す。「幼

幼稚園で子どもが他の子どもを叩くのと、職場で成人が同僚を叩くのは、先行因においても結果においても全く異なる」(Hartup,2005) 行動であることは十分に確認する必要がある。本稿では乳幼児、特に3~6歳の幼児を対象とする(1,2歳児の噛みつき行動に対する保育者の見方と対応に関しては、鹿嶋(2001)を参照)。

II 暴力に対する2つの見方

子どもの育ちや養育者の育て方は、養育者の有する発達観や社会・文化のしくみ(環境設定や制度)に強く影響・規定される。子どもの対人行動(暴力を含む)も養育者との関わりや社会・文化の中で構成される(鹿嶋,1995,2001)。特に、暴力に対する見方は時代的背景にも文化的状況にも強く影響を受けている(須田他,2004; 田中,1998; 山内他,2005)。「過去の教育は、非常なきびしさをもって子どものもつ“悪”つまり子どもの暴力や快楽追及、他人を傷害する傾向を制圧することに心をくわいてきた」(A.Freud,1984)。そのために家庭や学校、職場(徒弟奉公先)では容赦なく体罰が用いられてきた。現代においては暴力の行使や体罰は厳しく禁止される一方、戦争やテロなどのより大きな暴力が身近な問題になっている。これらの問題における原因論、個人の暴力と組織(国家)による暴力との関係、解決策(より大きな力によるか否か)などに関する議論は錯綜しているが、大別すると暴力を全否定する立場と暴力の中に「線を引く」立場がある。

ユネスコは「私は暴力を拒否します/つかいません/許しません/なくします」という宣言を発表している(心理科学研究会,2001)。この主張に反対する人は少ないが、問題はどのようにすればこのような目標に達する、あるいは近づくことができるかである。一つの立場は(子どもによるものを含めて)暴力を否定・拒否するという考えである。それに対して、目的は共有しながらも、暴力に対して否定・拒否するだけでなく、人間に内在する現象として、社会・文化・歴史的状況のなかで、現実的に捉えていこうとする見方もある。心理学の分野では特に精神分析がそのような見方を提供してきた。例えば、Fromm(1975)は「良性的攻撃と悪性的攻撃」を区別し、A.Freud(1984)は「攻撃行動の形式を詳細にしらべて記述し、その源泉を探り、正常あるいは異常な発達における攻撃性の果たす役割を研究する」としている。

本稿では「暴力を拒絶することではなく、…(暴力の廃絶という理念に立脚しながらも)暴力そのもののなかに線を引く」(酒井,2004)立場をとる。つまり、暴力が生じるメカニズムや生物的・心理的・社会的機能に目を向け、暴力の中にある否定すべきものを拒絶し、認めるべきものは別の形で発現させる手立てを模索する。断わるまでもなく、本稿は暴力を礼賛するものでも奨励するものでもない。本稿の目的は、子どもの用いる暴力に対して異なる立場の人の間に議論が可能となる枠組み・視点を提供することである。本稿では「暴力反対」という正論のもとで、暴力容認論が吟味されないまま潜行し、議論が抑圧されることを最もおそれる。

以下では、まず暴力否定論を概観し、次に暴力に対するもう一つの見方を整理する。最後に、乳幼児の暴力の中にどのような「線が引ける」か、実践的な課題として、対処法とそのときの

留意点について考察する。

III 暴力否定論

ここで言う暴力否定論では、暴力はなくすべきもの、なくなるはずのものであり、この原理は乳幼児に対しても適用され、以下のような主張を行う。子どもの暴力は、自己統制力や社会的技能の未獲得など子ども個人に帰属される。原因論として、後天説・環境論が採用され、家庭でのしつけの問題が「原因」とされることが多い。具体的には、家庭における体罰の使用、両親によるモデルの提供、子どもの暴力の使用に対する許容などが先行因としてあげられる(Baron & Richardson,1994)。暴力は、それまでの発達の歪みを示す「問題行動」もしくは子どもの「性格上の問題」と見なされる。原因(論)と現状(暴力の使用)が因果関係的に語られるように、将来は現状から決定論的に予想される。現在、暴力を使用する子どもは、将来的にも暴力的になりやすく、社会的な問題(特に仲間関係における問題)を抱え、非行・犯罪を引き起こす確率が高いと見なされる。したがって、暴力を抑制することが対処法の主眼となる。

現状と原因、将来像との関係については、従来の研究から部分的に証明されている。その一方で、これらの見方では不十分であるという主張もある。そこでは、系統発生、民族発生(文明化)、個体発生、社会文化的状況のなかに暴力は位置づけられる。さらに、暴力を単純に否定すべきものではなく、潜在力として内在するプラスの力が形を変えて発現したものであるとみなす。次に、このような考え方を整理する。

IV 暴力に対するもう一つの見方

1) ヒトが共通して有する暴力: 生物学的規定性、本能、文明化への適応

子どもの暴力に焦点を絞る前に、ヒトが生物的・心理的・社会的存在として暴力と切り離せない存在であることを示す理論を素描する。

生物的存在としてのヒトが有する暴力について、動物行動学は内的エネルギーの発散と解発刺激に、社会生物学は進化と適応に、行動遺伝学は繁殖成功度を高める遺伝的性質に焦点を当ててきた(Krahe,2004)。これらの領域では、暴力の発現に関わる本能の有無と、促進・抑制因子、他の種と異なるヒト独自の特徴について研究が進められている。

心理学的理論は、感情(本能を含む)、認知、行動(学習を含む)に焦点を当て、攻撃性を破壊本能、欲求不満、不快感情、怒りと覚醒、社会情報処理過程、学習(強化と模倣)、社会的影響としての強制力などにより説明してきた(Krahe,2004)。多くの心理学理論は暴力が発生する内的メカニズムや状況的要因を特定することにより、その発現を抑制しようとする点において、暴力否定論と共通点を持つ。これに対し、精神分析学では心理学的本能として攻撃性を想定する。例えば、Klein(1983)は死の欲動から攻撃欲動が派生し、生後6か月頃には対象を支配しようとする万能的・破壊的空想が作られると考えた。

社会心理学は物理的・対人関係的・社会文化的状況と暴力との関連が扱ってきたが、より大

きな文化的・歴史的な文脈の中における暴力、例えば、ブッシュマンやフランス革命、日本の若者組における暴力を取り上げた研究もある(田中,1998)。また、Elias(奥村,2001による)は暴力が文明化により変質してきた過程を明らかにした。

以上のように、暴力を理解するためには、生物学的・心理的・社会的側面を常に射程におかなければならない。次から、子どもの暴力に関わる見方を整理する。

2) 家庭での育ち

すべての子どもは父母から引き継いだ遺伝的特質を持って生まれ、ある養育環境の中で育つ。子どもは誕生時から個人差を示し、暴力の傾向についても遺伝的素因が存在すると考えられている。例えば、Perusse & Gendreau(2005)は遺伝と環境の相対的影響力についてメタ分析を行い、約40%は遺伝的要因に帰せられるとした。また、どの家庭も先祖から遺伝的特質と行動パターンを引き継いでいる。子どもの暴力の土壌となる養育環境も「引き継いだもの」の一つである。さらに、子どもの生得的気質と親の養育行動との相互作用により、子どもの攻撃性を説明しようとするモデルが提出されている(Olweus,1980)。生涯発達論やライフサイクル論では生命の連鎖が重視される。子どもと養育環境に加え、暴力などの「問題」行動も代々引き継がれてきた生命の「所産」であり、それらを単純に否定することは、現存する家庭と過去の家系、また現存する家族の多様性を否定することにつながりかねない。

これまでも子どもの暴力は、親の暴力の使用と暴力に対する態度、および親子関係の質と関連づけられてきた。例えば、親が家族内・外における対人関係の問題を解決する手段として、暴力を用いることは、①子どもに対するモデルを提供する、②対人関係パターンを形成・継承させる、③暴力の使用を容認・推奨することにより、子どもの暴力を促進する。このように暴力は「世代間伝達」する(Zoccolillo, et al.,2005)。

このような直接的な影響のほか、子どもの暴力に影響を及ぼす親・家庭の養育に関わる要因を整理する。

第一に、暴力とは直接関係しないと思われる親子関係の質、例えば両親(特に母親)との愛着関係の不全(Lyons-Ruth,1996)や父親との関係の欠如(May,1980,p25)、甘やかし(Storr,1973,p76)が暴力の先行因として挙げられてきた。子どもを最大限に甘やかし自由にさせると、子どもは万能感から過剰な要求を抱き、それが満たされないときには、自己を統制することも両親からの保護を得ることもできないため、暴力を用いて解決しようとする(Storr,1973,p76)。

第二に、両親の隠された期待や価値観に着目する必要がある。他者を(先制)攻撃する手段として暴力を推奨・容認する養育者は少ないが、自己防御や反撃としての暴力を容認する養育者は多い。「最低限必要な」暴力は存在するか否かは、子どもの暴力の使用についても中心的テーマとなる。

第三に、ある場面においてはある程度の暴力を使用することが「健全な発達である」という主張もある。例えば、Bettelheim(1980,p264)は、自分から暴力をふるうことと、自己防衛

やひどいことをされて黙っていないことを区別し、子ども本人の自己決定を重要視した上で、他の子どもから暴力を受けた場合、「正当なしつけで育てたとしたら、子どもはぶち返すだろう」と述べている。また、May(1980,p278)は不当な扱いを受けた場合、やり返すことができる「反抗・対抗の能力」は、人間に基本的な公正に向かって主張する能力であると記している。

第四に、親の暴力の使用は直接的に子どもの暴力を引き起こすだけでなく、問題に対して理性的・知的な対処法が存在しないことを教えることになる。Bettelheim(1992)は、子どもによる暴力の不適切な使用は親の攻撃衝動への対処法の失敗であり、暴力についての教育では親自身が抱える攻撃衝動への対処法を子どもに示すことがもっとも重要であると主張する。

最後に、家庭内で暴力を受けている子どもが、防御・反応として暴力を示すことがある。A.Freud(1984)は「大人に対する攻撃的行動…、は彼らがそれまで体験してきた冷たく、敵対的で闘争的な環境に対する防衛」であると述べている。また、不安を与える攻撃者の属性を取り入れることにより、不安を処理しようとする「攻撃者との同一視」が生じることもある(A.Freud,1982)。いずれの場合にも、子どもの暴力は環境への反応であり、大人や社会は単純に否定するのではなく、そのメッセージを受け取るべきである。

3) 暴力に対する見方

乳幼児の暴力に対しては、否定論で見たように「あってはならないもの」「なくすべきもの」とする以外に、次のような見方がある。

これまでの攻撃性に関する研究においても、暴力を形態や機能から、積極的/反動的、能動的/防衛的と分類し(岡田,2001;山崎,2002)、成長・独立のための暴力と非難されるべき暴力(Storr,1973)の間、「良性」と「悪性」の暴力(Fromm,1975)の間に線を引こうとする試みは行われてきた。

暴力に対する容認論には次の3つがある。①できればない方がよいが、「あっても仕方がない」「なくならない」「やむをえない」とする消極的容認論。②ある場合には必要である、用いるべきであるとする積極的容認論。上記のBettelheim(1980)やMay(1980)はこの立場にある。

さらに、③暴力を「悪性」の学習行動としてではなく、「ふつうの行動」であると見なす考えがある。Tremblay & Nagin(2005)は乳幼児における暴力(身体的攻撃)の出現頻度を概観し、「身体的攻撃は読み書きのように子どもが学習する行動ではなく、泣く、眠る…などのように…経験により統制することを学習する行動である」と述べている。自然に発現することを認めながら、統制の学習が強調されている点は今後の議論において重要である。

暴力を「容認」するのではなく、暴力の発現に積極的な意義を認める見方もある。まず、暴力を善の裏側にある悪の表出としてとらえた河合(1999)は、「生きる力は悪の形をとって表われてきやすい」「自己実現は悪の形で表われる」「マイナスの形は回復へのプラスの道筋」と考え、「悪を排除して善にする」のではなく、「悪いことのなかに入っているよいものの芽」に目を向ける重要性を指摘している。Winnicott(1990)も児童分析の過程において、「病的な内向から外的世界への回復時に、子どもは攻撃的になる」ことを見出している。

次に、子どもの暴力を子どもが抱える問題や助けを求めるサイン、養育者に対する警告とする見方がある(河合,1999)。これは上記の A.Freud (1984) や「(暴力行為は) 攻撃性の爆発という形での SOS のサイン」とする Winnicott (1999) の考えと共通している。この視点からも、子どもからのメッセージを受け取ることが大人や社会に問われている。

これに関連して、子どもの暴力を、自分の存在に意味が見出されないときや、自分の行動が外界に影響していると感じられないときの、「絶望的な」試みであるとみなし、暴力の基盤は衝動の抑制の失敗ではなく「無気力と無感動」にあるとする考え(May,1980,p28)もある。「暴力は力の過剰から…ではなく、無力性のゆえに生まれてくる」(May,1980,p9)。この視点からは暴力の抑制は一層の無気力を招くため、不適切な対処法と見なされる。

さらに、怒りは一般的には暴力の基盤に位置づけられ、否定的な評価をくだされやすいが、酒井(2004)は憎しみと怒りを区別し、後者はより生産的・建設的であることを指摘している。この分類によると、子どもの暴力は憎しみではなく、怒りの発現であり、生産的・建設的側面が内在しているが、対処を誤ることにより破壊的な憎しみに変容すると考えられる。

以上のように、暴力に対する見方には容認論から積極的な意義を見出す立場まで幅がある。暴力への対処法は暴力に対する見方と関連し、その誤りは一層大きな暴力や無気力につながりかねないことが示された。

4) 発達過程における暴力の表出

先述したように子どもの暴力と大人の暴力はさまざまな面で異なる。発達には直線的に進行するのではなく、依存が後の自立につながるように逆説的な過程を含む。子どもの暴力を理解するとき、その発達段階の特徴、その中の暴力の位置づけ、後の段階への逆説的な関係を考慮する必要がある。

暴力は身体(や道具)による身体に対する力の行使であるが、子どもが成長する過程において身体接触は重要な意義をもつ(Harlow,1978)。ある時期の親子間では身体接触を伴うじゃれ合いが見られ、そこでは親も子ども相手に対して「強い身体接触」を行うが、否定的に感じられることはない。子ども間(他の哺乳動物を含む)では“rough and tumble play”が見られる。これらの行動の延長に暴力があるのか(連続性はあるのか)、また、両者の間に明確な区別ができるのか否かは不明である。

子どもの暴力を発達過程における一時的現象としてとらえ、大人では抑制されるべきものだが、そのためにも発達過程の一時期には体験した方がよいとする見方がある。特に、思春期においては自己統制が困難であるため、(社会的にくみとともに)幼児期に「悪」を体験することが必要であり、「腕力を子どものときからある程度出していきながら、卒業する」(河合,1999)ことが幼児期の課題であるとする。

本稿で対象としている3~6歳児について、Erikson(1973)のライフサイクル論によると、心理社会的危機は「自主性対罪悪感」、支配的行動様式は「侵入的」とされている。「身体的な攻撃によって他人の身体の中に…、攻撃的な話しかけによって相手の耳や心に…、精神的な運

動によって空間の中に…、燃えるような好奇心によって未知なものに侵入すること」(Erikson,1973)がこの時期の活動を特徴づけている。

5) 育てる者と育てられる者の関係性の中の暴力

鯨岡(2002)は、発達を「育てる-育てられる」という関係の中で「育てる者」と「育てられる者」が同時進行で変容していく過程としてとらえ、「関係発達」という概念を提唱した。鯨岡(1998)によると人間存在、子ども、大人=養育者、発達過程はそれぞれ両義性を内在している。例えば、子どもは子どもであると同時に、将来大人になる存在であり、個々の存在であると同時に、集団の中で生活する存在である。これらの相反する面は「あれかこれか」ではなく、矛盾したままで両面が求められる。このような視点に着目しながら、暴力を関係性の中で位置づけていく。

養育者と子どもの関係は濃密なものであり、さまざまな感情を内包している。真剣な対面・対峙の中ではぶつかり合いは避けられない。May(1980,p185)は攻撃性(aggression)が語源的に前進・接近と傷つけることの両義性からなり、攻撃の反対概念は「平和愛好、配慮、友情」ではなく「孤立・無接触」であることを示した。また、近しい関係は常に愛憎をはらんでいる。この点に関してWinnicott(1990)は、攻撃の起源は活動性や運動性に近いものであり、攻撃性は愛の原初的表現の一部であると述べている。したがって、攻撃性の喪失は愛する能力や対象との関係を作る能力の喪失につながる。このような真剣・濃密な関係の中でのぶつかり合いは、仲間関係など他の関係でも見られる。

初期の養育者との関係では心理的な強い絆(きずな)が形成されるが、そこから脱け出し自立する過程において、絆(ほだし)を切断するために暴力的な破壊行動が用いられる場合がある。特に、3歳頃の反抗期では親に“No”を言うことで、自我の形成が行われる。親や保育者は育てる者であると同時に、子どもの欲望や成長を阻害する存在でもある(鯨岡,1998)。「障害物・対立者」としての育てる者に反抗し、ときとして「破壊」することは発達の過程に不可欠である(Bettelheim,1992; May,1980,p229)。

これまでの述べた養育関係に内在する暴力は、直接、養育者に向くこともあれば、空想や遊びの中で表現されることもある。また、養育関係で生じた怒り(暴力衝動)がものへの破壊や仲間への暴力に形を変えて表現されることもある(例えば、鹿島,1996a)。

6) 養育環境との関連

暴力の発生が種々の環境要因により引き起こされることは、社会心理学や環境心理学における研究から明らかにされてきた。ここでは養育環境に焦点を当て、物理的・対人的・社会文化的環境要因を整理する。

物理的環境要因としては、人口密度や温度など種々の環境要因が暴力(例えば犯罪)の発生と関連していることが明らかにされている。保育場面ではおもちゃの数や場面設定(コーナー設定や生活場面の区切り方)などの環境構成が、子ども同士のやりとり(暴力を含む)に影響する(鹿島,1995,1996b)。また、人工的環境は子どもの自然な探索行動を制限することにより、

攻撃性を喚起しやすい (Storr,1973,p72)。現在の養育環境 (家庭や施設) の多くは自然が不足した、人工的環境から成り立っていることには注意を要する。

对人的環境については、まず、子どもの世界を独自の世界として見た場合、暴力に対して大人とは異なる視点でとらえることが要請される。子ども同士の葛藤には、正義や秩序の維持など大人の視点から、より強い力を用いて介入することが求められる場合がある一方、大人の介入が子どもの世界に合わずに、より大きな葛藤を残したり、力による解決の有効性を示したりする可能性もある。子どもの世界は独自の世界であると同時に、大人を含むより大きな世界 (社会) の一部でもあり、養育者は子どもの世界や子どもらしさを大切にしたいと思いながら、大人としての役割を完全に捨て去ることはできないという両義性を抱えながら、子どもと関わる。

これに関連して、大人や社会の側から、子どもの能力や欲求以上に強い連帯感や秩序を養育環境に求めた場合、子どもは強制的な紐帯から暴力的に分離しようとする (Storr,1973,p90)。また、子ども同士に緊密な同一化を求める力は反作用としての分裂をもたらし、その際暴力が使用されることもある (Storr,1973,p92)。同様に、法と秩序が過度に強調された場合、それらを維持するために、あるいはその力に対抗するために暴力の使用が助長される (May,1980,p59)。「みんな仲よく」「みんな一緒に」「秩序を求める」養育環境が、暴力のような反作用を生み出しかねないところに発達逆説がある。

社会文化的環境に関しては、まず、ジェンダー観があげられる。「男らしさ」として暴力を容認・促進する風潮は、男子による暴力の行使と強く関連すると考えられている。この点に関しては多くの理論・研究・運動があるため、他に譲る (例えば、Ghiglieri,2002; Wrangham & Peterson, 1998)。その一方、女子についても攻撃性は無関係ではなく (Mitcherlich,M.,1989)、形を変えて見られるとする見方 (例えば間接攻撃、関係性攻撃) もある。

次に、メディアの影響がある。この点に関しては、暴力シーンを含んだ映像やゲームは子どもの攻撃性を増大させるという観察学習説が優勢であり、攻撃衝動を代替的に満足させるというカタルシス説は支持されていない (大淵,1993; 佐々木,1996)。その一方で、子どもの特性に焦点を当て、「自尊心が低く、自己に対する疑惑を有する一部の子どもにのみ悪影響がある」

(May,1980) とする見方や、大人の対応に焦点を当て、「暴力シーンに対する大人の反応により子どもの認知とその影響は異なる」 (Bettelheim,1992) とする見方もある。

日本文化に関しては、橘 (2002) の比較文化的研究が示唆に富む。日本の高校生はドイツ、スイスの高校生と同程度の怒りを感じ、「悪意的解釈 (相手がわざとやったと受けとめる)」を行う一方で、「非罪-非攻撃行動」をとる。つまり、感情や解釈からは攻撃が予測されながら、行動は抑制され、顕現的な攻撃は少ないという特徴が見出された。このような特徴は子どものときから育まれ、日本にはそのような文化的な仕掛けが存すると思われる。

この点に関して社会的な仕掛けに注目した河合 (1999) は、従来の社会では暴力が生起することを抑制するのではなく、その暴走を防ぐためのしくみが存在したが、現在はそのようなしくみが存在しなかったり、暴力を前提としたそのようなしくみを用意しにくかったりするため、

暴力に歯止めをかけにくくなっていると指摘している。具体例として、川村 (1998) は若者組を取り上げ、若者による暴力が非日常的宗教的・儀礼的暴力と非常時的社会的・政治的暴力として制度の中に公的な位置づけと機能を持っていたこと、制度の解体により精神主義的緊張が要請され、行政による強制的秩序維持・管理が始まったことを示した。

さらに、社会構造やイデオロギーの影響に関して、個人の責任が強調されると他人に対する操作が強まる (May,1980,p209)。階級の明確な社会では暴力は構造的に抑制されているが、流動的な社会構造では構造的な抑制が少ないため、個人による暴力の使用が増大する。暴力の発現は個人が自由を得た代償ととらえることができ、暴力の抑制のために構造的な抑制を強めることにこそ危機感を抱く考えもある。

最後に、暴力否定論が希求する「平和」に対しても異なるイメージがある。酒井 (2004) はキング牧師やガンディの非暴力主義について触れ、「平和とはたんに『波風の立たない』状態」ではなく、「ダイナミックな抗争状態さえはらんだ、たえざる力の行使によって維持、拡大、深化されるべき力に充ちた状態」であることを示唆し、暴力を否定するあまり、平和に内在した抗争さえも否定する考えに警鐘を鳴らしている。

7) 暴力の機能～子どもが得るもの～

一般的に暴力は自己の利益を得るためや力を誇示するためであるとされるが、子どもの暴力ではこれらの機能に加え、次のような機能があると考えられる。

先に述べてきたように、暴力は子どもの「探索・知的好奇心」の表出であり、その抑制は知的活動を低下させる。また、子どもは初期に形成した絆からの分離と独立を勝ち取る。これに加え、子どもは攻撃的能力により「発達する個性を守り主張する」 (Storr,1973,p82)。さらに、個人の対抗意志を行使することにより意識が生まれ (May,1980,p284)、反抗できることにより責任をとりうる能力が生まれる (May,1980,p285)。また、Adler (1984) は優越性を人間の生の原動力と見なした。暴力による優越性が承認されないにしても、優越性を求めるエネルギーを行使する場は必要であると考えられる。

暴力は一般的には悪の発露、道徳性の欠如と見なされるが、精神分析では個々の人間や社会には必ず悪が存在することを前提とし、それを否定・拒否することではなく「引き受ける」ことを課題とする。そして、個人や社会が引き受けられない場合には、他者や他の社会へ悪を投影することになり、その結果、より大きな暴力が生じると考える (May,1980,p328)。暴力は自分の中にある悪と向き合い、それを引き受ける契機となる。「道徳生活は善と悪との間の対話」であり、子どもは「悪と善双方に対してより大きな感受性を持つように成長」する必要がある (May,1980,p306)。

最後に、子どもは暴力の傾向を生得的・後天的に身につけるが、その統制方法は教育に導かれた学習により獲得する他はない。暴力は最初から外的に制御されるべきではなく、最終的に自己制御されるべきものである。その場合、制御の前段階として、自己の中にある暴力を認め、受容することが必要となる。発達段階初期におけるこの過程が、後の自己制御につながる

(Bettelheim,1992)。

8) 暴力の機能～社会が得るもの～

子どもの暴力は他の子どもや養育者、所属する集団にとって脅威となりうるが、それがあ
る意味を持って受け取られた場合、他者や社会にとって何らかの機能を果たす場合がある。

先にも述べたように、子どもの暴力は子どもが抱える問題や助けを求める SOS のサインであ
り、大人や社会に対応を求めているとみなすことができる (A.Freud,1984 ; 河合,1999 ;
Winnicott,1999)。

よりマクロな視点からは、暴力には秩序(法関係)を確定・維持する機能があり、権力を保
証する (Benjamin,1969)。社会的秩序は暴力により守られ、暴力は既存の権力者(社会では国
家、従来の教育場面では大人)が集中して行使する。これに対し、対抗暴力(酒井,2004)は権
力上の変化を惹起し、権力の再構成を行う。民主主義は原則として反対意見を許容するもので
あり、権力者に反対勢力との取り組みを要請する。キング牧師の非暴力直接行動は、「平和的な
手段ではなく」、「話し合いを絶えず拒んできた地域社会に、どうしても争点と対決せざるをえな
いような危機感と緊張をつくりだそうとする」ものであった(酒井,2004)。

9) 暴力の過度の抑制による影響

暴力の発現よりもその過度の抑制をより問題視する立場がある。攻撃性は生きていく上で必
要な力の表出であり (May,1980)、「この生命力がその発達の上で障害されると、怒りや激怒
あるいは憎悪といった要素がこれに結びつくようになり、やがて残忍な攻撃性となる」
(Thompson,1972)。A.Freud (1984) も「生き生きとした攻撃性を制止することの悪影響」に
ついて考察している。

生きることは「戦い」のメタファーで表現されることが多いが、戦いにおいては、「力試し」
(May,1980,p21) や「敵」とその敵に対する「勝利」を必要とする (Storr,1973,p141) こと
から、生きることに内在するものとして戦いは積極的に意味づけられる。

また、上述したように、暴力や攻撃性を自分で引き受けられない場合には他者に対する投影や置
換が生じる。そして「攻撃性の投影や置き換えは、個人や民族の間における軋轢、疑惑、紛争
の多くにおいてもその原因となっている」(A.Freud,1984)。

最後に、暴力に関する最大の矛盾は暴力を抑圧・支配・予防するためにより大きな暴力が行
使されたり認められたりする点にある(酒井,2004)。特に、暴力が生じていないところで、生
じる可能性があるという理由で、より大きな暴力が振るわれる事態(酒井,2004)は社会におい
ても養育場面においても避けなければならない。

V 暴力への対処法

以上のように、乳幼児による暴力の先行因、意味、結果は多様な視点から理解される必要が
あることが示唆された。このような理解に基づいた、乳幼児の暴力への対処法を考察する。言
うまでもなく、暴力により得るものがあるとしても、それは人為的に引き起こすべきものでも、

看過すべきものでもない。しかし、実際の養育場面において生起する限り、よりよい対応が求
められる。

1) 暴力の受け手(被害者)への対応

乳幼児の暴力に関して、第一に配慮すべきは受け手(被害者)である。身体的被害に対して
早急に、最大限の注意をもって対応することに加え、「心のケア」も求められる。「加害者」側
に注意が向くあまり、「被害者」が放置されることはあってはならない。何らかの被害を受けた
子どもは受けた傷だけではなく、「慰めてもらえないこと」や「理解されないこと」からも二
次的な被害を受ける。まして「叩かれる方が悪い」という「被害者非難」は許されない。ただ
し、身体的・心理的ケアの後に、「何が起こったのか」を説明することや、それまで従事してい
た活動に戻ったり、「加害者」と共に行動したりするなど、行動レベルで心理的・関係的な「修
復」がなされることも重要である。

2) 暴力の制止

暴力で最も脅威となる特徴は、「暴力が暴力を呼ぶ」ことにある。個人レベルでは「力(能力
や武器)の入手」や「力の行使自体」がより大きな力の行使を惹起する自律的運動を始め、人
間が暴力をふるうのではなく、「人間の方が暴力装置に使いこなされ、振り回される」(酒井,
2004)状態に陥る。関係レベルでは報復の連鎖が起きる。さらに、子どもの生活の中において
も「何があっても許容されない」暴力もある。これらの暴力に対しては理解ではなく、単純な
制止が求められる。この点に関して、河合(1999)「絶対にいけないものがある」という枠を
作り、それが厳守されることが子どもにとっても、養育環境にとっても必要であると述べてい
る。

3) 内的状態の理解

子どもによる暴力が生じたとき、まずは対応が求められるが、対応中・後に子どもの内的
状態に対して思いを馳せることが重要である。その場の状況のみならず、1日/最近の変化、
家庭環境との関連、対応による変化など「思索」の材料にはこと欠かない。特に、暴力が家庭
環境要因により、家庭外(例えば保育園)で生起する場合、子どもは家庭内外の価値観の違い
による葛藤状態に置かれる。暴力を環境に対する反応、あるいは自己の変化の徴候としてとら
えると、養育者側の受け取り方、意味づけが問われる。

4) 統制方法の指導

子どもの内的状態を理解するだけでなく、子どもが自分の暴力衝動・傾向に対処ができる
ように教育する必要がある。その方法としては、暴力に対する直接的な対処法の指導、代替表
現の指導、回避方法の指導、情緒全般の発達促進がある。

暴力に対する直接的な対処法に関して、Bettelheim (1992) は情緒障害児の治療経験から、
①子どもは暴力の可能性をもっているが、その反対の傾向も持ち、それを育てなければなら
ないこと、②暴力に対しては無知では防げないのであり、子どもは暴力について学びたがって
いること、③人間の持つ野獣の性質についての知的な認識を得た上で、暴力的傾向を馴化し、共

存していくことを学ぶ必要があること、④学習・生活における最大・最重要問題は「自分自身が恐れている考えの克服」にあり、一部の子どもにとってはその考えが「暴力」であり、それを爆発させることなく建設的な仕方であらうという確信を子どもに与えることが教育の眼目となることなどを主張した。

5) 代替表現様式（コミュニケーションと儀式化）の指導

暴力が目的達成のための手段（社会的には承認されがたく、非効果的であるが）であるならば、暴力を回避するためには、問題解決の代替手段を子どもが習得する必要がある（Bettelheim, 1992）。その一つはコミュニケーションである。暴力とコミュニケーションは相互排他的である（May, 1980, p69）。上述したように暴力は最初から抑制されるものではなく、自己制御することを学ぶべきものである。その手段になるコミュニケーションは教育され、学ばなければならない。ただし、形式的・表面的なことば遣い（例えば「ごめんなさい」）を教えるだけでは、不十分のみならず悪影響がある。体験と遊離したことばは力を持たない。（河合, 1999）。子どもの内的状態を理解した上で、暴力に替わる力・手段となることばとコミュニケーション技法を教えることが、暴力回避のための有効な教育となる。

6) 情緒発達全般の促進

A. Freud (1984) は、幼児期早期の愛着関係が阻害された結果として現われた破壊的な攻撃行動に対しては、厳正な規律、処罰、訓戒のような教育方法に頼るべきではなく、治療は今まで不十分であった情緒発達の方に向けられるべきであることを指摘している。

7) 大人への依存方法の確立・回避方法の指導

子どもの成長過程においては子どもだけでは手に負えない問題があり、そこでは養育者が指導・対処する必要がある。暴力はそのような問題の一つであり、養育者は「私に言いなさい」と子どもに指示し、状況に対応する。しかし、ここでも「養育者が何とかする」と「子ども（たち）が自分（たち）で何とかする（してほしい）」の両義性の間で、養育者も子どもも揺れ動く。子どもだけでは対応が困難な場合もある。その一方で、養育者が権威を持ちすぎると「おかあさん・先生に言いつける（大人を味方につける）」ことだけが有効な対処法になり、子ども自身が解決策を模索しない危険性もある。さらに、養育者が「言いなさい」と言うだけで、何もしない場合には子どもの気持ちを深く傷つけることになる（Bettelheim, 1980）。

また、暴力を受ける場面を回避することや、その危険性を覚悟した上でその場面に参加するか否かを子ども自身に判断させること（Bettelheim, 1980, p151）も、大切な教育となる。

8) 環境の整備

子どもの養育・保育における環境構成の重要性が認識されるようになってきた。実際に養育者は環境構成によって子どもの行動を調整する（例えば鹿島, 1995）。暴力に関しては促進要因（人口密度、騒がしさなど）を減らすことに加え、暴力を惹起する感情や衝動を表出・発散する場を「保障」することが重要である。例えば、雨続きで外遊びができないときに、室内での運動を提供・許容するような養育者側の配慮である。日常の生活において「勝ち負け」に気が

とられる子どもに対しては、運動やゲームで正々堂々と「勝ち負け」を競う場など「力を発現する場」を提供しているか否かが問われることになる。

VI さいごに

本稿では乳幼児（特に 3～6 歳）による暴力に対する多様な見方とそれを考慮した上での対応について考察を行った。児童期や思春期、青年期以降の暴力に対しては異なる理解と対応が必要である。発達は両義的で逆説を含む過程であり、暴力が発生する状況は複雑に入り組んでいる。したがって、子どもの養育・保育においては「一回一回のとらえなおし」が必要である。Bettelheim (1980, p177) は「私が強く反対するのは、あれかこれかという考え方です。…身体的攻撃を加えることを許すか、さもなければ怒りの感情を抑圧してしまう、というふうな考え方です」と述べているが、本稿の基本的な立場はこのことばに集約される。本稿では、その「とらえなおし」の枠組みとなる視点の整理を行った。

引用文献

- Adler, A. 1984 人生の意味の心理学（高尾利数訳）春秋社（Adler, A. 1932 *What life should mean to you.*）
- Benjamin, W. 1969 ウォルター・ベンヤミン著作集 1 暴力批判論（野村修訳）晶文社（Benjamin, W. 1921 *Walter Benjamin: Werke Band 1.* Suhrkamp Verlag KG.）
- Baron, R. A. & Richardson, D. R. 1994 *Human aggression (2nd ed.)*. Plenum Press.
- Bettelheim, B. 1980 母親たちとの対話（北條文緒・古崎愛子訳）法政大学出版局（Bettelheim, B. 1962 *Dialogues with mothers.* The Free Press of Glencoe.）
- Bettelheim, B. 1992 生き残ること（高尾利数訳）法政大学出版局（Bettelheim, B. 1979 *Surviving and other essays.* Alfred A. Knopf.）
- Erikson, E. H. 1973 自我同一性（小此木啓吾訳編）誠信書房（Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle.* International University Press.）
- Freud, A. 1982 アンナ・フロイト著作集第2巻 自我と防衛（黒丸正四郎・中野良平訳）岩崎学術出版社（Freud, A. 1968 *The writings of Anna Freud. Vol. II.* International University Press.）
- Freud, A. 1984 アンナ・フロイト著作集第5巻 児童分析の指針（上）（黒丸正四郎・中野良平訳）岩崎学術出版社（Freud, A. 1968 *The writings of Anna Freud. Vol. V.* International University Press.）
- Fromm, E. 1975 破壊（作田啓一・佐野哲朗訳）紀伊國屋書店（Fromm, E. 1973 *The anatomy of human destructiveness.* Holt, Rinehart and Winston.）
- Geen, R. G. & Donnerstein, E. 1998 *Human aggression.* Academic Press.
- Ghiglieri, M. P. 2002 男はなぜ暴力をふるうのか（松浦俊輔訳）朝日新聞社（Ghiglieri, M. P.）

- 1999 *The dark side of man*. Perseus Books Publishing.)
- Harlow, H. F. 1978 愛のなりたち (浜田寿美男訳) ミネルヴァ書房 (Harlow, H. F. 1971 *Learning to love*. Albion Publishing Company.)
- Hartup, W. W. 2005 The development of aggression. In Tremblay, R. E., Hartup, W. W. & Archer, J. (eds.) *Developmental origins of aggression*. Guilford Press.3-22.
- 鹿島達哉 1995 保育園の1, 2歳児クラスにおける仲間関係の発達とその社会的構成—大人の構成的役割と文脈としての生活との関連— 広島大学教育学部紀要 第一部 (心理学) 44, 123-131.
- 鹿島達哉 1996a 1, 2歳児の仲間関係の発達の文脈としての大人—子ども—子どもの三者間のやりとり 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学) 45, 111-119.
- 鹿島達哉 1996b 保育の現場から—具体性と研究との対話をめざして— 発達 67 ミネルヴァ書房 8-14.
- 鹿島達哉 2001 1, 2歳児の仲間関係をとらえる保育者の見方 やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編) カタログ現場心理学 金子書房 pp148-155.
- 河合隼雄 1999 いじめと不登校 潮出版社
- 川村邦光 1998 若者の“力”と近代日本—若者組の解体と再編・統合— 田中雅人 (編著) 暴力の文化人類学 京都大学学術出版会 pp217-250.
- Klein, M. 1983 メラニー・クライン著作集3 愛、罪そして償い (狩野力八郎訳) 誠信書房 (Klein, M. 1975 *The writings of Melanie Klein Vol. 3. Love, guilt and reparation and other works*. The Melanie Klein Trust.)
- Krahe, B. 2004 攻撃の心理学 (秦一士・湯川進太郎訳) 北大路書房 (Krahe, B. 2004 *The social psychology of aggression*. Psychology Press Ltd.)
- 鯨岡峻 1998 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻 2002 <育てる者>から<育てられる者>へ NHK ブックス
- Lyons-Ruth, K. 1996 Attachment relationships among children with aggressive behavior problems. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 64-73.
- May, R. 1980 わが内なる暴力 (小野泰博訳) 誠信書房 (May, R. 1972 *Power and innocence*.)
- Mitscherlich, M. 1989 女性と攻撃性 (杉村園子他訳) 思索社 (Mitscherlich, M. 1985 *Die friedfertige Frau*. A. Fischer Verlag GmbH.)
- 岡田督 2001 攻撃性の心理 ナカニシヤ出版
- 奥村隆 2001 エリアス・暴力への問い 勁草書房
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 サイエンス社
- Olweus, D. 1980 Familial and temperamental determinants of aggressive behavior in adolescent boys: A causal analysis. *Developmental Psychology*, 16, 644-660.
- Perusse, D. & Gendreau, L.G. 2005 Genetics and the development of aggression. In R. E. Tremblay, W. W. Hartup & J. Archer (eds.) *Developmental origins of aggression*. Guilford Press. 223-241.
- 酒井隆史 2004 暴力の哲学 河出書房新社
- 佐々木輝美 1996 メディアと暴力 勁草書房
- 心理科学研究会 2001 平和を創る心理学 ナカニシヤ出版
- Storr, A. 1973 人間の攻撃心 (高橋哲郎訳) 晶文社 (Storr, A. 1968 *Human Aggression*. Penguin Press.)
- 須田努・趙景達・中嶋久人 2004 暴力の地平を超えて 青木書店
- 橘良治 2002 攻撃性と養育の関係に関する国際比較 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学 発達・教育編 ナカニシヤ出版
- 田中雅人 (編著) 1998 暴力の文化人類学 京都大学学術出版会
- Thompson, C. L. 1972 人間関係の精神分析 (大羽葵・澤田丞司訳) 誠信書房 (Thompson, C. L. 1964 *Interpersonal psychoanalysis*. Basic Books.)
- Tournier 1980 暴力と人間 (山口實訳) ヨルダン社 (Tournier, P. 1977 *Violence et Puissance*. Delachaux et Niestle.)
- Tremblay, R. E. & Nagi, D. S. 2005 The developmental origins of physical aggression in humans. In R. E. Tremblay, W. W. Hartup & J. Archer (eds.) *Developmental origins of aggression*. Guilford Press. 83-106.
- Winnicott, D. W. 1990 児童分析から精神分析へ (北山修監訳) 岩崎学術出版社 (Winnicott, D. W. 1958 *Collected Papers*. Tavistock Publication.)
- Winnicott, D. W. 1999 希望のサインとしての非行 (牛島定信監修) 岩崎学術出版社 (Winnicott, D. W. 1986 *Home is where we start from*. The Estate of D.W. Winnicott.)
- Wrangham, R. & Peterson, D. 1998 男の凶暴性はどこからきたか (山下篤子訳) 三田出版会 (Wrangham, R. & Peterson, D. 1996 *Demonic males*.)
- 山内進・加藤博・新田一郎 2005 暴力: 比較文明的考察 東京大学出版会
- 山崎勝之 2002 発達と教育の領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学 発達・教育編 ナカニシヤ出版
- 山崎勝之・島井哲志 2002 攻撃性の行動科学 発達・教育編 ナカニシヤ出版
- Zoccolillo, M., et al. 2005 The intergenerational transmission of aggression and antisocial behavior. In R. E. Tremblay, W. W. Hartup & J. Archer. (eds.) *Developmental origins of aggression*. Guilford Press. 353-375.

本稿は平成15年度～17年度科学研究費補助金萌芽研究「保育園における乳幼児の暴力の社会的構成に関する文化心理学的研究」(課題番号: 15653049)の研究成果の一部である。